

2022年度 幼児教育プログラム

科学する心を育てる ～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～



子どもの **思い** から

溢れる **たからもの**

～地域の特性を活かし、

対話を通して得られるもの～

社会福祉法人遍照会
東大沢保育園

目次

- 1、はじめに …… 1 p
- 2、『科学する心』について自園の考え方 …… 1 p
- 3、昨年度の実践を生かして～振り返りから課題を見つけて～ …… 1 p～2 p
- 4、昨年度の実践を踏まえて今年度のテーマ …… 2 p～3 p
- 5、科学する心を育てるために大切にしたいこと（職員間共有したこと） …… 3 p～4 p
- 6、保育実践～子どもの思いから溢れるたからもの～ …… 4 p～14
 - 事例Ⅰ 対話から始まる地域性を生かした遊び（4 p～12 p）
 - 事例Ⅱ 『もったいない』から始まる創造性と人間性の育ち
～SDGsの視点を持って～（12 p～14 p）
- 7、まとめ …… 15 P
- 8、おわりに …… 15 p



1、はじめに

今年度で、ソニー幼児教育支援プログラムの保育実践論文の応募は2回目となる。

昨年度論文の作成と発表を通して、子どものひとつひとつの行動が、様々な心身の成長に繋がっていることが視覚的、具体的に理解できると共に、職員間で日々の保育を振り返りながら、その内容について検証したり、新たに計画と実行に移したりできる、システムを作成することが出来た。

子どもと共に過ごす毎日が、いかに驚きと発見の連続であり、その事象を継続的に子どもたちや保護者と共有できることが保育園職員としてどれだけ幸せなことであるか職員同士自然に言葉で表現し合う姿が増え、共有することが多くできた。

自園で働くことに喜びを感じ、他の職員とエピソードの共有を行いながら保育内容を相談でき、保育園職員自身の『自分らしさ』を主体的に表現できる職場風土や保育の質の向上に大きな影響を与えたように感じる。

昨年度応募した論文の総評をいただいた中で、私たち保育士が、子どもを取り巻く環境のひとつであることは理解しているものの、大人主導の活動が多く見えるとのアドバイスをいただいた。

また、2022年1月29日に行われたソニー教育財団主催のオンラインセレモニーを視聴し、質問もさせていただいたことで、より昨年度の保育内容について検証を行うことが出来た。

そこで今年度は、子どもの①言葉②表情③態度について徹底的に観察することと記録を取ることで、「科学する心」について昨年度の経験を生かしながら深めていく事とした。

2、『科学する心』について自園の考え方

社会福祉法人遍照会東大沢保育園では、子どもと大人が支え合い励まし合いながら共に育つ「共育」を柱とする法人理念の中で、生涯にわたる「生きる力の基礎を培う」という保育目標を掲げている。

この「生きる力」とは保育所保育指針（平成29年3月告示：厚生労働省）に記載のある、「育みたい能力・資質」

・知識及び技能の基礎 ・思考力、判断力、表現力等の基礎 ・学びへと向かう力、人間性等が相互に関係しながら育つものだと考えている。

自園の保育目標と照らし合わせながら「科学する心」を捉えると、子どもが心身ともに安心で安全な生活の中で、子どもと子どもを取り巻く環境（物的・人的・社会）が一体となり、子ども自身が環境を創造していく過程の中、積極的にその環境に働きかける姿や、その環境の中で、子どもが教え込まれたものではなく、自ら獲得した知識や技能を十分に表現しながら自信を持って行動しようとする姿の事であると考えている。

「科学する心を育てる」という事は、ひとりひとりの発見や好奇心、体や心の発達を観察、把握、検証し、子どもたちと充分に対話し、子どもの夢（未来）に向かい、一緒に進んでいくという保育の営みの中で、生涯にわたる「生きる力の基礎を培う」という目標に向かう私たち職員の中心的な内容の事であると考えている。

昨年度、遍照会全体の施設で行われた「でーれー、ぼっけえ、もんげえ、おもしろかった保育発表会」にて、これからの社会状況について全職員間で共有する時間があった。

これからの時代は、これまでも増して、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性が高く、先行きが不透明で、未来の予測が困難な状態である。そのような社会で子どもたちが生きていくために必要な力はどのようなことであるか、日々職員が一体となって考えることが重要であるという内容に、東大沢保育園内でも話し合いの場が設けられた。

今年度も『科学する心』とはどのように育つのかという事を職員間共有、検討し、昨年度のテーマであった子どもたちの『いま』を捉える力から発展し、未来や夢を想像し、未来や夢に向かって創造できる子ども（ひと）を育てる保育について話し合いの場を設けた。（令和4年3月）

3、昨年度の実践を生かして～振り返りから課題を見つけて～

事例①生き物への継続的な関わり

これまでは、子どもたちが園庭で見つけたものを園庭だけでの遊びとして捉えていたことで、興味の深まりや継続性が見られなかった。虫かごやデジタル機器を使用し、視覚化する事や、子どもと保育士でミーティングと称したサークルタイムの時間を設定することで、生活の中で『なんでだろう？』という思いを深めたり、友達や保育士、保護者と共有したりする姿が見られるようになった。

また、自分でやってみようという意欲が強くなり、自身の経験や知識を生かして主体的に行動しようとする姿が見られるようになった。

《見えてきた事》

○子どもの興味は、その事象に出会った瞬間だけでなく、周りの環境が作用することによって日々の生活の中にも継続や広がりがある。
その広がりの中で、対話的・主体的な「科学する心の育ち」の姿は、より深まっていく。



《課題》

○カメラなどのデジタル機器を使用した時、その瞬間を子ども自身に撮らせて欲しいという思いから、遊びを中断したり、待たせたりすることが多かった。記録の方法について見直すことが必要だと感じた。
○保育士がカメラの故障等、精密機器の子どもの使用について敏感になってしまい、制限や禁止の言葉が多くなってしまった。



事例②想像性と創造性から始まる遊び～積み木遊びから～

子どもたちの『○○かもしれない』という気づきに対して、保育者が答えをただ教えるのではなく、子どもと対話しながら、継続的に創造できる環境を同じ場所に設定したことで、試行錯誤しながら何度も挑戦する姿が多く見られ、強い意欲が感じられた。達成感を感じる遊びがあることで、その喜びを身近な大人や友達と共有しようとする姿が増え、新たな遊びへと繋がっていった。

《見えてきた事》

○子どもが主体的に獲得した経験や知識は、自然と思考力や表現力新たな挑戦の意欲へと繋がっている。年下の友達に分かりやすく身体の部位の名前を教えようと説明書を作成する姿には、人間性の育ちも遊びの中で自然と育っていることを感じた



《課題》

○子どもたちが創造した『もの』についての記録は多く行ったが、子どもの言葉や表情、友達との関わり等についての記録が少なくひとりひとりの『思い』に寄り添えなかったと感じる。



4、昨年度の実践を踏まえて今年度のテーマ

子ども自身の未来に期待を持ち、進もうとする力の強さは、本来日常の中で多く存在していることに気づかされた。安全、安心は保育を行う上で第一条件であるが、禁止や制止の多い関わりでは、子どもたちの主体的意欲は、減少してしまうことも分かった。

『できないからやめる！』のではなく『どうしたらできる？』の意識を子どもたちが持ちながら生活できる環境を整えていく事で、前述した、これからの不透明で未来予測が困難な時代を生き抜く力に繋がるのではないかと、私たちは考えた。

その経験のために、園内のみならず様々な環境に視点を向けながら、子ども自身が友達や、身の回りの大人と積極的に対話し、安心して自己表現をしながら創造できる環境を子どもだけでなく保育園職員も楽しみ、ポジティブな気持ちで対話し創造していく事が大切であると考えた。

そこで今年度は、『**子どもの思いの大切さ**』に重点を置き、



子どもの「思い」から溢れる 未来に繋がる「たからもの」

というテーマを掲げ、保育を考えていく事にした。

これまで東大沢保育園では、年間のテーマを決め、その内容に合わせた仕掛けを多く行ってきていたが、

このテーマ自体もリーダー保育士が個人的に持ち寄ったものの中から、保育内容の想像しやすいものの選定が多かったように感じていた。

そこで今年度は、子どもの思いの大切さを職員全体で共有するためには、まず『職員同士の思いを共有しなければいけないのでは？』と職員会議で話題となった。そのまま職員会議はテーマについての話し合いに。

それぞれのクラスの思いや職員一人一人の思いを聞き出しながらのテーマ決めとなったので、時間はかかったが上記のテーマが決まった途端に、各職員から保育内容の提案が溢れ出てきた。

職員同士、自分の思いが穏やかに受け入れられたり、誰かと発展させたりすることの喜びを体験できる貴重な時間となったことで、『思い』を汲み取る事についても意識を深めようという考えが出てきた。

これまでも行ってきた保育環境の設定や職員同士の関わりの形にも新しい取り組みを行った。

取り組み①先生たちの『たからもの』

コロナウイルス感染拡大防止による、保育園職員のマスク着用により、子どもたちに保育士の表情が見えない状況が続いている。毎年、保育士の表情が分かる写真を各クラスの前に掲示をしているが、今年度はその写真の下に、職員一人一人の『たからもの』の記載を説明と共にを行った。

職員同士はもちろんの事、子どもや保護者もその存在に気づき、それぞれの『たからもの』について子どもの前でポジティブに話し合う姿が多く見られた。

子どもたちの遊びの中でも、見つけたものや作ったもの描いたものを『たからもの』と発言する子が多く、保育士の子どもの発見や探索行動についての発言や関わりが、ポジティブで温かなものとなった。



少し照れますが、保護者との会話も増えました！！

取り組み②『保育ラボ』でのエピソード共有と検証

これまで毎月行っていた職員研修の場を保育士の挑戦したいことや、保育の中でのエピソードを共有、検証する時間設定を増やした。

ラボという名前は Laboratory（研究所）というところから名前をもらい、『日々のちょっとした出来事も実験、研究していこう！！』という思いから制定している。

若手、ベテラン関係なく自分の意見を言える場があることで、今までの受動的な研修から、職員ひとりひとりの、能動的な発言や参加意欲が見られると共に、相手の思いを受容したり、自分の思いと重ねたりすることで、楽しい化学反応が起きた。



保育園における戸外あそびって何だろう？

5. 科学する心を育てるために大切にしたいこと（職員間共有したこと）

- 昨年度は、子ども自身が記録を残すことを保育者が固執しすぎたことを反省し、子どもの言葉、表情、態度については保育者が記録し、振り返りができるようにする。
- 記録したものは、子ども、保護者、職員共に、視覚的、具体的に再確認できるように写真やエピソードを記録・共有ができるよう、アプリでの配信を行うようにし、保育園や家庭で閲覧しながら子ども同士の対話、子どもと大人の対話を多く行える環境を用意する。
- 子どもの思いを（言葉、表情、態度）大切にし、逃さないようにすることで、自然とひとりひとりの気持ちに寄り添いながら、禁止や制止の言葉ではなく、その子の良さを認めながら保育者も一緒になってイメージを共有する事や作り上げていく事、目標へ向かうことを楽しみながら行う。
- 子ども自身が遊びこむ時間や、友達との関わりの時間を大切にしよう心掛けることで、遊びが途切れず、自分たちの興味を深めたり、協力したりしながらイメージの共有を図ることが出来るようにする。
- 保育ラボも含んだ、職員間の子どもの『いま』の姿の共有の機会を増やし、子どもを取り巻く環境が自分のクラスだけでなく、園全体、保護者や地域社会にまで広がるよう働きかける。
- 保育の中での子どもたちの姿や思いに対して、積極的に共有すると共に職員同士対話を深め、仮定を立てながら多面的に考えを深め、子どもとの関わりを検討していく。

東大沢保育園 『思いから溢れる たからもの』
～科学する心に視点を置いて～（令和4年度）

《科学する心とは》

子どもが心身ともに安心で安全な生活の中で、子どもと子どもを取り巻く環境（物的・人的・社会）が一体となり、子ども自身が環境を創造していく過程の中、積極的にその環境に働きかける姿や、その環境の中で子どもが教え込まれたものではなく、自ら獲得した知識や技能を十分に表現しながら自信を持って行動しようとする姿の事であるとする。

《共有する思い》

子どもの『思い』から始まる行動のサイクルの中で、専門性を用いながらエピソードの共有を行い、（保育ラボ活用）子ども自身が想像し、創造できる環境を整えていく事や、保育者自身が温かい子どもの環境のひとつとなり、子どもを取り巻く様々な環境（物的、人的、社会）の懸け橋となることが、学びへと向かう力と、豊かな人間性を育むことと考える。

《子どもの思いを中心に》



④ 思考、判断、表現

- ・子ども自身の世界観や表現を壊さないようにし、安全の配慮を充分に行いながら指示や注意は必要最低限とする。
- ・子どもの思いやその表現を肯定的に認めていく。
- ・子ども自身が気付くことを大切にす。

③ 知識・技術の主体的獲得

- ・保育士と一緒に考えたり、対話する中で、子ども自身が、発見したり試行錯誤したりした過程を認めていく。
- ・子ども自身が手を触れたり、使用したりできる環境を整える。
- ・専門的な知識を用いながら、園内外の環境と連携していく。

② 経験

- ・一方的に教え込むことや、禁止、制止の中での経験は、行動の弱体化に繋がると考える。
- ・『うまくいかない』という経験を簡単には奪わないようにする。
- ・視覚的に子ども自身が経験したことの振り返りができるようにする。

① 行動

- ・言葉、表情、態度の記録を行い、子どもの思いについて職員同士検証する。
- ・保育士の価値観や判断ではなく、子ども自身の思いに留意し、禁止や制限ではなく、『できること』を探していく。

6、保育実践～子どもの思いから溢れるたからもの～

事例Ⅰ. 対話から始まる地域性を生かした遊び

東大沢保育園の隣には、1984年4月11日に埼玉県越谷市とオーストラリアのキャンベルタウン市（ニューサウスウェールズ州）が姉妹都市となったのを記念して、1986年に整備された公園、キャンベルタウン公園がある。（正式には鷺高第五公園）オーストラリアにもコシガヤ・パーク（Koshigaya Park）という公園があり関係性の深さを感じられる。

徒歩1分という好立地のため、園児の散歩コースとしては定番の場所である。遊歩道の隣の水路や広い原っぱには、カモやハトなどの鳥が集まり、その鳥に出会うのも子どもたちの散歩中の楽しみのひとつである。そんな子どもたちの大好きな公園へのお散歩中の会話から大切にしたい思いが聞こえてきた。

『もうひとつのキャンベルタウン公園』

（令和4年3月下旬 3・4・5歳児異年齢児クラス）



昨年度3月、卒園が間近に迫った年長児と異年齢児クラスで散歩に行く機会があった。クラスの中でも、このキャンベルタウン公園へ行く事を喜ぶHさん（年中男児）。

散歩先がキャンベルタウン公園だと分かった、『今日も鳩追いかけるんだ!!』と意気込んでいた。

すると、一緒にいた年長女児が、『この前、空グループさん（年長児グループ）で違うキャンベルタウン公園に行ったんだよ！大きなアスレチックがあって楽しかったよ』

それを聞いたHさんの言葉が急に少なくなり、何か考えている様子が見られた。その日の目的地に着くと、予定通り、鳩を追いかけたり、友達と鬼ごっこをしたり、アスレチックを楽しんだりしていたが、帰りの道中に『先生？もうひとつのキャンベルタウン公園行きたいな』と不安そうな顔で保育者にだけ聞こえる声で伝えてきた。



「考察と保育者の関わり」

園近隣の環境での遊びに対して、楽しみを見出している H さん。その環境にいる生物や植物などを予測しながら、遊びへの意欲を感じられるのは、これまでの H さんの経験によるものだと感じた。年上の友達に、自分の知らない環境についての情報を聞いた時、H さんの中での疑問や発見、憧れなどの思いが溢れたように見えた。H さんを取り巻く人的環境が新たに H さんの世界を広げるきっかけになったと感じる。

年長女児の言っていたもうひとつのキャンベルタウン公園というのは、毎年3月ごろに年長児のお別れ遠足などで利用している、オーストラリアキャンベルタウン市の姉妹都市提携 10 周年を記念し、キャンベルタウン市より寄贈された鳥が放鳥されており、オーストラリアの「自然」を体験することができる、キャンベルタウン野鳥の森公園（以下、野鳥の森公園）の事であるが、あえてどのような施設かは H さんに伝えずに、『先生も行ってみたいな』と言葉で伝えたと、笑顔で何度も頷いていた。

保育士に自分の思いを言葉で伝える際、不安そうな顔をした H さん。これは、自分の思いが受け入れてもらえるかの不安があったのではないかと予測できた。これからの子ども同士やと大人の対話の中に安心という情緒的要因の重要性を感じた瞬間でもあった。

このエピソードを保育士間共有したところ、園から少し距離があることや、交通量の多さから、発達を踏まえ、毎年3月まで行事として取り入れていた野鳥の森公園へ行く事について、『お別れ遠足』や『卒園前の思い出』という非日常の喜びは多く感じられるものであったが、子どもの遊びや知識、技術の主眼的獲得が見られたかという点、そこまで多くないのでは？と議論になった。

東大沢保育園があるこの地域特有の環境に、子どもの思いが向いているのであれば、叶えてあげたいという意見と子どもの体力や交通量の多さにより、危険ではないかという意見に分かれた。

子どもの『思い』から、3月に職員会議で話し合った『できないからやめる』ではなく、『どうしたらできるか』の挑戦として、職員同士の意見交換を行いながら H さんの行動をよく観察するようにした。

『野鳥の森お散歩計画始動』

（令和4年4月上旬 5歳児クラス）

新年度が始まってすぐ H さんの保護者より声をかけられた。

『H がそらグループ（年長児）になったから野鳥の森公園に4月5日に行くと言っているのですが本当ですか？毎年年長さんが3月頃に行く事は知っていますが（東大沢保育園卒園の兄弟児がいるご家庭）、A さんの保護者に聞いたら A さん（5歳児女児）もそう言っていると言っていたので・・・』

仲の良い子ども同士の会話の中で、空グループさん（年長児）になったら野鳥の森公園に行くという事がいつの間にか、子ども同士で日付まで指定し、予定していた。

そこで、年長児でサークルタイムを開き、H さんと A さんの思いを他の年長児にも聞いてもらう機会を設けた。

H さん『野鳥の森公園に行きたい』

保育者『どうして？』

A さん『前の空グループさんが行ったから』

H さん『すごく面白いんだって！！』

短い言葉であったが、積極的に他児の前で発言する H さんと A さん。

2人の野鳥の森に行きたいという話を聞いて、家族で野鳥の森に行ったことのある K さん（年長女児）が『あっそこ行ったことある！！カンガルーとピンクの鳥がいるんだよ』と発言。

『えーピンクの鳥なんかいないよ』という子もいれば『見てみたい』と積極的に発言する子が多くいた。

サークルタイムは5分程度であったが、隣の子と別の話を始める子、椅子から離れ、別の場所に行く子がいた。



(令和4年4月11日～4月22日 5歳児クラス)

前の週のサークルタイムより「野鳥の森公園に行きたい」という子どもたちの声が多く聞かれたこともあり、この思いに対して、この日から保育者を交えた対話が始まる。

保育者は以下4点の問いを子どもたちに伝え、一緒に考えていく事とした。

- ①野鳥の森公園までどのように行くのか？
- ②野鳥の森公園までにどんなことに注意したらよいか？
- ③だれといくのか？
- ④持ち物は？

初日のサークルタイムでは、保育者の問いに対して、競って自分の思いを伝えようとする子と、その場で静かに友達の話の話を聞いている子とがいた。

その日は、保育士がその発言をひとつひとつ紙に書いて見せることで終了した。

サークルタイムが終わってからそらグループの思いを保育士が記入した紙を見ながら K さん（年長男児）が、一言『疲れちゃうよ』と発言。

保育者が話を聞くと『あんまり遠いところに行くと僕、足が痛くなっちゃうんだよね』

次の日、サークルタイムを始める前に、K さんに昨日の発言を他の友達にも伝えてみようかと提案したところ、照れながらも『遠いところに行くの僕、疲れちゃうよ』と伝えることが出来た。

すると R さん（年長男児）が『K くんが疲れたら先生が抱っこすればいいじゃん』と発言。

『R さん良い意見だね！K さんだけなら抱っこできるけどたくさんの子が疲れちゃったらどうしよう』と保育者が言うと『確かに』と答える R さん。他の子と一緒に笑っていた。

この日からサークルタイムが終了しても、

- 『抱っこできる先生がたくさん行けばいいんじゃない』
- 『前の年長さんがアスレチックあるって言ってからそっちも行きたい』
- 『のど乾いたら困るから水筒持っていこうよ』

と、友達同士で話し合った内容を保育者に伝える姿が多くなった。

その都度、次の日のサークルタイムで友達とその意見を共有する時間の中で対話が生まれ、自然と子どもたちの思いが記入された計画書の原案が出来上がった。



「考察と保育者の関わり」

昨年度からの H さんの『野鳥の森公園に行きたい』という思いが保育園という環境の中だけでなく、家庭までつながった事例であると考えます。

保育者に自分の思いが肯定的に受け止められた経験や喜びを自分だけのものではなく誰かと共有しようとする姿は、H さんと A さんとの対話の中に見ることができ、協同性や言葉による伝え合い等の育ちは、日常の中にも数多く存在することがよくわかった。

この2人の思いが、自然発生的に他の友達に伝わるのが良いのか、サークルタイムの中で他の子どもたちへと伝えてもらうのかの2択の迷いを保育者は持ったが、保育者同士でこのエピソードを共有した中で、昨年度の子どもたち『いま』を捉える経験をもとに、この思いが消えてしまう前に共有することが、良いのではないかと保育者同士で結論付け、サークルタイムで発表してもらうことを決めた。

サークルタイムの中で K さんの経験が自然と発言されたことで『野鳥の森公園』への興味や期待がグループ全体のものになるきっかけだったと感じる。

最初の時点では子どもたちの態度から、まだひとりひとりの興味としては小さいもので、『行きたい！』という気持ちはあっても、実際に自分たちが、野鳥の森公園に行くまでのイメージを子ども同士で共有はできていなかったと感じる。

しかし、毎日行うサークルタイムの中で、保育者が視覚的に子どもたちの思いを図にすることで『疲れちゃう』と発言した K さんが、これまでの自身の散歩の時の経験とグループで目標となっている『野鳥の森公園へ行きたい』という思いをすり合わせ、自身の気持ちを言葉として表現したことで、さらに具体的なイメージとして他の子ども、自身の知識や経験を思考しながら対話を深められたのだと感じる。

保育士が、子どもたちの目標に対して子どものポジティブな内容の思いだけでなく、ネガティブな内容の思いも逃さずに子どもたちと共有することは、自分と他人との様々な違いを受け入れながら世界を創造していく力になる、優しさや思いやりの心の育ちにもつながると感じた。

『園長先生は何が好き？～お・て・が・み～』

(令和4年4月27日 5歳児クラス)

この日のサークルタイムでは、『計画書をどのように作るか』『園長先生と主任先生へ許可を取るにはどうしたらよいか』を話していた。終了後、園庭で戸外遊び中のWさん(年長女児)とTさん(年長男児)が話をしている場面に遭遇した。

Wさん『園長先生たちのお手紙早く作らなきゃ!』

Tさん『シールとはんこをもらうんだっけ?』

Wさん『はんこがいいよ!内緒で作るって決めたからきっとシール無いよ』

Wさん『先生!紙ください』

保育者『いいけど何に使うの?』

Wさん(保育者の耳元で小さな声で)『ほら、園長先生へのお・て・が・み』

保育者(計画書の事と分かり)『OK!どうぞ』※八つ切の白画用紙を渡す。

Wさん『先生!どうやって書くの?』

保育者『Wさんは、園長先生にお手紙でどんなことが聞きたいの?』

Wさん『野鳥の森公園に行ってもいいですか?って聞きたい!』

保育者『その気持ちをそのまま書くのはどうかな?』

Wさん『いいね!!Tくん一緒にやろう!!』

Tさん『うん!』

保育者※サークルタイムで使用している言葉を記録した紙をWさんに渡す(①)

Wさん『「ちょ」ってどうやって書くんだったっけ?Tくん書ける?』

※WさんとTさんで書けるひらがなを交換しながら書いている。(②)

Wさん『ハートとか書いたらK先生(主任保育士)喜ぶんじゃない?』

Tさん『好きな食べ物のほうがいいと思うよ』

Wさん『先生!K先生の好きなものなーに?』

保育者『うーん先生も知らないなあ。直接聞いてきてごらん?』

※WさんとTさんは『えっいいの?行ってきまーす』と元気よく走って

主任保育士を別の部屋へ探しに行き、質問をすると計画書のところに戻ってくる。(③)

Wさん『イチゴが好きだって!!』Tさん『5個も食べたいって言ってたよ!』

Wさん『わたし、赤いところ描くからTくん緑のとこ描いて!』(④)

Tさん『いいよ』

Wさん『園長先生は何が好きなんだろうね?』

Tさん『あとで聞きに行こう!!』

Wさん『そうだね!』

2人は園庭で遊ぶ時間が終わるまで計画書を作っていた。

入室の際、園長先生を見つけると、内緒のはずの計画書を見せながら、

Wさん『ここに園長先生の好きなもの描いてあげたいから、好きなもの教えてください』(⑤)

園長『そうねえ巨峰が好きよ』

Wさん『巨峰?』

園長『紫のぶどうの事よ』

Wさん『分かった!ありがとう!』

そばで見ていた保育者はその手紙をこの後どうするか尋ねた。

Wさんは、『みんなに見せたい』と答えたので、いつも朝の決まった時間に行っていたサークルタイムを急遽、給食前の時間に開き、そのお手紙をTさんと共に友達に紹介する姿が見られた。(⑥)

巨峰の絵が書き加えられた、お手紙(計画書)を園長のところに持っていき、無事にハンコがもらえると、壁にテープで張り付け、異年齢の友達にも紹介する姿が見られた。

①



②



③



④



⑤



⑥



「考察と保育者の関わり」

子ども同士や大人との対話を深めていく中で、同じ目標を持ちながら、自分自身で挑戦できる環境があることは、子ども自身が想像するイメージに向かって、自らの経験やこれまで感じたことのある気持ちを主体的に使用しながら未来（夢）を創造する強い意欲になるのだと感じた。

Wさんの『お・て・が・み（お手紙）』という発言の中に、友達や保育者とお手紙交換という遊びの経験が生かされ、『ハートが書いてあったらうれしいかも』という発言の中には、自分が嬉しかったことは、もしかしたら他の誰かも嬉しいという相手の気持ちに寄り添う人間性の育ちも感じられた。

Tさんとの協力の中にも、自分ができることを把握しながら、友達同士で役割を決めるコミュニケーションは、アメリカの発達心理学者パーテンの「子ども同士の社会的相互交渉の6つの分類（※）」に照らし合わせると、これまで、自己中心的であった連合遊びから、協同あるいは組織的遊びの現われの瞬間ではないかと捉えることもできた。

この社会的相互交渉はパーテンの分類した順番通りに発達するものではないが、子どもひとりの思いや遊びの環境（時間や場所）を保証することが、子どもの社会性や主体的なコミュニケーションに繋がる要因のひとつであることが確認できた。

これまで、子どもだけで部屋の移動をすることは危険と判断し制止していた関わりを、保育者が安全を確保したうえで、実行に移せるようにしたことで、WさんとTさんが主任保育士に直接『自分たちの知りたい情報を獲得しに行く』という主体的な行動に繋げることもできたと考える。

※Parten,M,B (1933) .Social play among preschool children. The journal of abnormal and social psychology,28(2).136-147

『お散歩テスト～評価ではなく道標～』

（令和4年5月2日 5歳児クラス）

子どもたちとの対話の中で、解決しなければいけないことや、子どもと保育者の担当内容が決まっていた中で、『疲れちゃう』と発言したKさんの思いの解決策はまだ、見つからないでいた。

問題点	担当と内容
○保護者へのお知らせ	▶○保育者（保護者宛に実施日の手紙の作成）
○園長先生と主任先生への許可	▶○そらグループ（計画書の作成）
○給食までに怪我をしないで帰ってこられるか	▶○そらグループと保育者 （同等距離散歩と交通ルールテストの実施）

そんな中、保育者からの問題提起のひとつの『野鳥の森公園までにどんなことに注意したらよいか？』という事に対して、子どもたちから『赤信号はわたらない』『車が来たらすぐ止まる』『バイクも来るよ』と交通ルールや、園外での危険について話し合う機会があった。

保育者『いろいろな交通ルールがあるね。怪我をしないように安全に野鳥の森公園に行くにはどうしたら良いんだろう？』

Jさん『じゃーみんなが安全にお散歩できるかテストしようよ！！』

保育者『テスト？』

Jさん『そう！お散歩テスト！！』

保育者『いいね！』

早速サークルタイムでその話をJさんにしてもらおうと『早くテスト行こうよ！』と意欲にあふれていた。この日は、予定を変更し、園近隣の様々な交通環境を利用しながら散歩を行った。

この散歩が、『疲れちゃう』と不安があったKさんの思いを変えるきっかけとなった。

Kさん『あの標識は横断歩道あります』『あれは制限速度30キロメートル』『あれは止まれマーク』

保育者『Kさんよく知っているね！みんなー！Kさんがいろいろなこと教えてくれるよ』

保育者や、友達に認められたKさん。自分の知っている標識や、道路での危険、お店の名前、アパートや建物の名前を先頭に立って友達に教える姿があった。

散歩が終わった後、保育者が『Kさん疲れは大丈夫？』と聞くと、

Kさん『大丈夫！楽しかったよ』と笑顔で親指を立てグッドサインを保育者に見せていた。

「考察と保育者の関わり」

『テスト』という子どもの言葉を私たち保育者は、これまで学力や性能を検査して、評価をするという意味で捉え、子どもたちの前で使用する事に抵抗を感じていた。しかし、子どもたちは自分たちのできることを自ら試すことで、次のステップへ繋がるひとつの指標としてこのテストという言葉をもっと積極的に捉えながら使用している姿を見て、考えを改めるきっかけとなった。

間違えることは、失敗ではなく、自分たちの目標としているものへの成功につながる道標として考えることは、物事の順序を考えたり、見通しを立てたりする力、すなわち思考力、判断力、表現力など育ちに繋がっていることが分かった。

また、子ども自身が身の回りの人と積極的にと関わりながら試行錯誤を繰り返し、答えを見つける過程の中に、学びへと向かう力や人間性の育ち、自分や友達が見つけたことを、知識や技能として自ら獲得していく事も感じた。

Kさん自身の得意なことや知識を友達や保育者に認めてもらいながら積極的に表現できたことは、不安感の解消だけでなく、自己肯定感や自尊心、新たな挑戦の意欲なども育まれ、心情の変化を強く感じた。

予定をしていた保育内容を変更し、散歩を行ったことで感じられた今回の事例だが、子どもの『思い』を大切にしたい関わりの中で、日課の取り扱いについても柔軟に考える必要があると職員間で議論が深まることとなった。

確かに、毎日の習慣や見通しのある中で生活することは、子どもたちの情緒の安定や、知識・技能の獲得につながる部分も多く大切にしたいことではあるが、その中に柔軟性を持たせることで、子どもたちの意欲や興味に、寄り添うことができるのではないかと。しかしそのためには、保育者個人の動きでは難しく、クラス間や業種間を超えて、チームで子どもたちの生活を支えることが重要であるという結論が共有でき、さらに保育園生活の流れについて職員同士の対話も深まっていった。

『計画実行～どきどきとワクワク～』

(令和4年5月 5歳児クラス)

とうとう、野鳥の森公園お散歩当日。

登園から、『ドキドキするねー』『やっと行けるねー』等友達と話しながら積極的に身辺処理を行う姿が見られ、意欲や期待の高さを感じられた。

同距離の散歩は行っていたが、いつもとは違う車通りの多い道に子どもたちの口数は少なく、保育者が随時話す言葉をよく聞こうと集中する姿が見られた。

目的地の公園入口に到着すると、

『車いっぱい怖かったね』『怪我してる人はいませんかー』等、緊張が解け、友達との会話も多くなった。

Kさん『これから受付して中に入るんだよ』

受付をして中に入ると、『あっ！！カンガルー！！』

サークルタイムの中で話に上がった動物を発見したと思った子どもたちだが、

Jさん『えっでもワラビーって書いてあるよ？』

Kさん『ほんとうだ！カンガルーじゃなかったんだね！ごめんごめん！』

『ピンクの鳥は中にいるんだよ！』

ゲージの中に入ると、それぞれが思い思いの場所に観察へと行った。

『ピンクの鳥・・・本当にいたんだ・・・』

『あそこに止まっているのがオカメインコかな？』

『これが鳥さんのおうち？』

『もー鳥さん！！ちょっと待ってー！！』

『うわ！追いかけてこないで！えーと・・・イシチドリさん！ごめんなさい』

(※野鳥の名前が書いてあるパンフレットの写真と見比べながら)

保育園への帰り道。

『保育園にいたら給食食べて、キンショウジョウインコの絵描く』

『私はモモイロインコとキバタン』

この日から、子どもたちの遊びの中に『野鳥』という言葉が多くなっていった。



「疲れた～！
でも、本当に
楽しかった！」

「考察と保育者の関わり」

これまでの子どもたちの言葉やサークルタイムの様子などを視覚的に残すことや、ICTを利用した保護者への配信等により、家庭でも野鳥の森公園に行く話題が増えたと感じる。保護者より、『あと何回寝たら野鳥の森公園！！って毎日言ってから寝るんですよ！本当に楽しみにしているんですね』と声をかけられることも多かった。

子どもの言葉、表情、態度を逃さないよう記録する事で、子どもや保育者が自然と振り返りを行い、対話が増えたことも子どもの興味や意欲の持続に繋がってはいるが、保育者の保護者への発信も子どもの声を中心にしたことで、家庭での対話にまで繋がったのだと感じた。

家庭で保護者と話した内容や、経験した内容を保育園で、他児に紹介したり遊びを深めたりする姿を見て、遊びの深まりが加速するためには子どもを取り巻く環境が強く作用することが分かった。

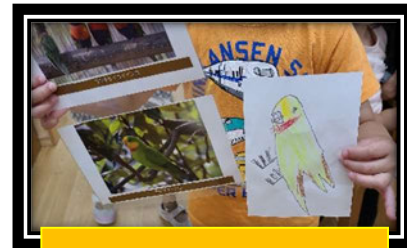
当日の様子を見てみると、子どもたち同士で考えていたことや思っていたことと実際に見たものと同じであったり、違っていたりすることに面白さを感じ、主体的に観察したり調べたりする姿があった。

保育園に帰ってきた際も、『疲れた〜』と発言する表情の中に達成感を感じる笑顔が見られた。子どもたち自身が対話しながら実行まで進めてきた過程を改めて振り返りながら、保育者も一緒に心から喜んだ。

昨年度までもこの野鳥の森公園には訪れているが、子どもも保育者も興味の持続はあまり感じられなかった。しかし、今年度子どもたちの『思い』から始まる計画を立てたことで、一過性のものではなく、目標を達成した後も、遊びや表現に繋る姿を見ることが出来た。

見てきたものを言葉表現だけでなく絵画や工作などで表現する姿の中に、子どもの創造性を感じた。

創作したものについては部屋の中の見えるところに展示し、継続的に創作を続けられるようにした。



色鉛筆でオカメインコ



粘土で
フライカワセミ



カプラで
止まり木



パターンブロックで
ガマガチヨタカ

『野鳥を呼ぼうよ！』

(令和4年6月 5歳児クラス)

『保育園に野鳥を呼ぼうよ！！』

室内での選択遊びの中に野鳥の森公園での経験が生かされた遊びが広がっていく中、実際に野鳥を保育園に呼びたいという声が上がった。

さっそく、そらグループ(年長児)のサークルタイムで、子どもたちの話し合いが始まった。

そらグループの子どもたちは、『どんな材料で作ろうか?』との疑問に、『紙で作ったら?』『雨で壊れちゃうよ』『牛乳パックなら四角だよ』等、意見が出たが、『野鳥の森公園では白い木できていたよ』という意見が出たことにより、木で巣箱を作ることを決めた。

木で作るにあたり、材料の木材だけでなく、切断用ののこぎりや、接着用のボンド、釘についても保育者と一緒に使い方や特性について、『知りたい』という思いが溢れてきた。

保育者の見守る中で、友達とトライアル・アンド・エラーを繰り返す姿が見られた。(特に屋根の取り付けは釘打ちがうまくいかず、何度も、相談しながら、やり直していた)

その中で『釘打つからここ押えておいて』『ボンドはみ出してない?』と、協同性を発揮しながら遊ぶ姿が見えた。

完成すると、異年齢児の友達や、保育者たちに自慢しながら見せる姿があった。



《考察と保育者の関わり》

実際に生き物と触れ合った事で、その動物の暮らしや生態についても意識が深まり、自然との関わりや、生命尊重の気持ちが育まれていると感じた。野鳥を保育園に呼ぶために、どんな鳥の家をつくるか様々な素材の特性についても子どもたちの知識の多さに驚いた。この知識は、遊びだけでなく、日常生活の中でも培われるものであり、子どもの吸収力の高さの気付きにもつながった。

(紙は濡れると弱い、糊では接着が弱い、木を切るにはのこぎりという道具が必要…等)

これまで、安全性から使用する事を避けていた、のこぎりや金槌、釘の使用も『危ないから触らない』ではなく、『安全に使う』事について意識を持ちながら、共に約束や使い方を決める事で、子ども自身の経験の機会を逃さないだけでなく、子ども自身が友達と協力しながら、試行錯誤を繰り返し、自ら様々な能力や資質を育むことができると強く感じた。

子ども自身が、身の回りの環境を想像し、創造する力は私たち職員が目標とするこれからの未来を『生きる力』の育ちとして捉えることができると感じ、子どもたちの達成感を感じる瞬間が、私たち職員の達成感を感じる瞬間ともなった。

現段階ではまだ、子どもたちが作成した巣箱に鳥の姿はないが、園庭で遊ぶ際には必ず、巣箱を設置したやまももの木を見上げ確認する子どもたちと一緒に対話しながら、思いを叶える方法を探していきたいと考えている。

《事例Ⅰを通して科学する心の育ちの考察》

Hさんの野鳥の森公園に行きたいという思いをAさんが日々の関わりの中で共感したことから、『行きたい』願望から『行く』という目標へと変化したことが分かる。

サークルタイムを通して、友達や保育者と対話し、その目的のために必要な過程や環境の用意を自分の経験や知識を主体的に表現しながら、仮定し、実行に移しながら、自分たちなりの答えを導き出していくサイクルが繰り返し見られた。

その日経験したことや考えたことを家庭に持ち帰り、保護者等、身近な人との会話の中で、また新たな情報を得たり、写真や図鑑などを使用し疑問に思うことを自分なりに解決し、友達や保育者に報告したりするなど継続的に興味を深めていく事や、新たな興味の発見へと繋がりが確認できた。

サークルタイム自体も4月上旬の個々が自分の思いを友達の意見と関連性がなく発言する姿から、友達の意見を聞いて、自分の知識や経験と照らし合わせ、目的に向かって対話をする姿への変化が見られた。

その対話から目的を達成するために挑戦する意欲、協同性や思考力のめばえ、言葉による伝え合い等、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が包括的に育まれているように感じた。

これまで、子どもの姿を捉えながらも、保育士が主導となり行ってきた内容とは異なり、子どもの思いを子ども自身が叶えていく行動は、決して非日常な事では無く、日々の遊びの延長線上にあることだと感じた。

この遊びの中で、子どもたちの好奇心や探究心を育み、友達や身近な大人との主体的なコミュニケーションの学びに繋がっていると考える。

自園で考えている「科学する心」つまり、「子どもと子どもを取り巻く環境（物的・人的・社会）が一体となり、子ども自身が環境を創造していく過程の中、積極的にその環境に働きかける姿や、その環境の中で子どもが教え込まれたものではなく、自ら獲得した知識や技能を十分に表現しながら自信を持って行動しようとする姿」は、遊びの中で育つことが確認できた。

この遊びを職員間で共有した際に、これからの未来の予測が困難な社会の中で、自分自身の『思い』を大切にしながら、自分以外の人との主体的なコミュニケーションの中で、表現、受容し、解決、創造していく力は未来を『生きる力』として捉えられると結論付けることができた。

1人の思いからそらグループ全体へと繋がりと、達成感を感じたり、新たな挑戦ができたりする、このかけがえのない時間の中で、完成した巣箱がそらグループの子どもたちみんなの“**たからもの**”となった。

子どもたちの“**たからもの**”を保育者も一緒に大切にしながら、今後も継続していく遊びの環境を、対話の中で溢れる思いを逃さないようにしながら、子どもたちと協力して創造していく事、子どもたちを取り巻く環境の一員となる事に、職員同士喜びを感じている。

《今後の方向性》

巣箱作成の日から、野鳥の森公園で出会った『野鳥』と自分たちの身の周りには『野鳥』の色の違いについても、疑問が出てきたそらグループの子どもたち。

毎年6月頃に園庭に飛んでくるシジューカラにも興味を示し、作成した巣箱に入ってもらうにはどうしたらいいか、友達同士で対話を深めている。

(まだ子どもたちは名前を知らず『野鳥さん』と呼んでいる)

家庭や保育園の中で野鳥の事を調べる中で、地域によって住む動物が違うことを発見。保護者との対話の中で、身近にあるキャンベルタウン公園とオーストラリアの関係を知ることが出来た。

自分たちが住む地域から視点が広がり、ここは日本という国であることが分かり、更には外国への興味へと繋がっている。

そらグループの遊びの中にも、国旗の種類や、世界地図を使用した遊びが見え始めているので、今後子ども自身の『思い』を大切にしながら、友達、保護者、保育士と共有していこうと考えている。

また、散歩の中で、様々な環境に触れたことで、自分たちが生活している地域の特性についても意識の深まりが見られる。

職員が家庭で使用していない保育園近隣の地域の地図を持参したところ、『ここは行ったことある』『今度ここに行く計画を立てようよ』と今回の野鳥の森公園散歩計画の経験が自信となっている発言が見られ、思い出の写真を貼りながら、子ども自身が作成するお散歩マップの作成が子どもたちと保育者の共通の目標として進んでいる。



事例Ⅱ 『もったいない』から始まる創造性と人間性の育ち～SDGsの視点を持って～

『私も使いたかったのに！！』

(令和4年5月 3・4・5歳児異年齢児クラス)

選択遊びの時間、お絵かき用の紙を使おうとしていたKさん。(年長女子)先に紙が置いてあるところにいたMさん(年少女子)とトラブルになっていました。

話を聞くと、『絵を描く用の紙が最後の1枚で、その紙をMさんが破いていた。私も使いたかったのにもったいない！！』と泣きながら怒るKさん。Kさんと話していたMさんも保育者の後ろに隠れ、涙を流していた。

近くにいた子どもも集まってきて自然と子どもたちの中で対話が始まった。

Rさん『先生に新しい紙もらったら』

Kさん『この紙が使いたかったの！』

Rさん『ちぎった紙1枚もらったら？』

Kさん『大きい紙が使いたいの！』

Rさん『じゃー私が糊で張ってあげるよ』※この発言でKさん泣き止む

Kさん『糊だとべたべたで使えないよね』

Rさん『テープで張ったらいいよ』

Rさん『先生テープちょうだい！』

保育者『どのテープが良い？』※マスキング、セロハンテープ、ガムテープを見せる。

KさんRさん『これ！』

Rさん『Mちゃんこの破れた紙もらってもいい？』 頷くMさん。

(柄付きのマスキングテープを指さし、二人でテーブルに敗れた紙を持っていく)

『再利用の獲得』

Rさん『どんな形に貼る？』

Kさん『ここにお姫様を描きたいからお城かな？』

Rさん『いいねー！私テープ切るからKちゃん貼って！』

途中でマスキングテープの量が減っていることに気づくRさん。

Rさん『これ全部使っちゃったら、もったいないよね』

Kさん『うん！もったいない！』

Kさん『透明のテープも貸してもらおうよ』

※保育者にセロハンテープを借りに来る。

2人で話し合いながら、行っていると保育者と一緒にMさんが見学に来る。

Kさん『Mちゃんさっきは怒ってごめんね。ほら見て！お姫様のお城だよ』

Rさん『Mちゃんは何描いてほしい？』

その後Mさんも同じテーブルに入り、年長女児の2人に教えてもらいながら、テープを切ったり貼ったりする遊びを行っていた。

『もったいないからお父さん指の長さまでね！』

『そこはもう貼ってあるから大丈夫！同じ所に貼ったらもったいない』等

『もったいない』という言葉をよく使いながら、遊ぶ姿が見られた。



『紙漉き体験からの学び』

(令和4年6月 3・4・5歳児異年齢児クラス)

『もったいない』が遊びの中で多く聞かれる中で、『紙はどのようにできるの？』と子どもから保育者に質問があった。紙ができる過程を見せたいと保育者同士で話し合ったところ、トイレトペーパーと網戸用の網を使用した紙漉きはどうか？という意見が出た。

初回はトイレトペーパーが水に溶ける様子を驚きの声が聞かれた。網の上で乾かすのを観察していたNさん。2日目に少しずつ液が乾いて白くなっていく様子に気づいたNさんがクラスの異年齢児に教える姿が見られた。

3日後。液が完全に乾いて紙になっていることに、子どもたちは大興奮。新たに紙漉きを行う子、トイレトペーパーに良い匂いのするハーブを混ぜる子、出来上がった紙に自然物を使って装飾をする子など、遊びこむ姿や豊かな表現、友達との対話が見られた。

(でんぷん糊の量について混ぜる量が少ないと乾いた際に紙が破れてしまうことへの気付きがあった)

ハーブ(ミント)入りの紙を作ったKさんは、『いい匂いのたからもの見せてあげる！』と同じクラスの友達(異年齢児も含む)に匂いをかがせたり、こだわりについて紹介したりと、言葉での伝え合いや豊かな表現が見られた。

また、Yさん(年長男児)の『トイレトペーパーがもったいない』という発言から、クラスの次の解決目標となった。



「考察と保育者の関わり」

『もったいない』を辞書で調べると、『有用なのにそのままにしておいたり、むだにしてしまったりするのが惜しい』（※goo 辞書より引用）と出てくる。

私たちや子どもたちが、普段何気なく利用しているもののほとんどが、自然や多くの人の力により、様々な過程を経て身の回りに届いていることを保育者自身も改めて子どもの気付きにより感じた。この気付きの中で、『もったいない』という思いを深めていきたいと感じた。

SDGs の視点についても、私たち保育者が整える保育環境の視点のひとつとして、意識を深めようと、保育者同士で対話を行っていくと、2002 年に「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱した考え方である、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）について共有する機会ができた。

『すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する』（※文部科学省ウェブページより引用）この機会の中に、自然物から人工物が作られる事や人工物が再利用される過程について知る経験が含まれるのではないかと保育者の意見が出たことで、ひとつの案として紙漉きを行う環境を整える事とした。

子どもたちは、トイレットペーパーが水に溶けていく不思議や、改めて紙に戻っていく発見に、不思議や疑問の発見を楽しみながら、友達と自分の思いを表現し合い遊びを深め、広げていると感じた。

型に流し込んだ液が乾いていく様子を観察したり、繰り返し行う中で、自然物や身の回りの物を混ぜてみたりする姿、友達と不思議や発見を解決するために対話を通して解決する姿は、私たちが保育内容を評価する視点として置いた SDGs や ESD の内容が包括的に表れていたように感じる。

SDGs や ESD のために行う大人主導で行われる保育ではなく、保育者も含んだ環境のひとつのきっかけが、子どもたちの遊びの中での発見や、広がっていく『思い』に繋がり、その経験が SDGs や ESD の意識の育ちへと繋がるのではないかと考えることもできた。

「事例Ⅱを通して科学する心の育ちの考察」

K さんの『もったいない』という思いに対して R さんの優しさや思いやりが、【無くなってしまふもの（ゴミとなってしまうもの）】から【再利用できるもの】として K さんの意識を変え、年下の友達 M さんへの関わりの変化をもたらす結果となったと感じる。

そこからクラス全体の遊びの中にも、『もったいない』という言葉が、物を大切にしようとする意識として年長児より異年齢の子どもたちへ伝えられていったと感じる。

また、友達と『思い』を共有しながら遊ぶことは、新たな『思い』を生むきっかけとなることが分かった。今回のケースでは、自分の考えや想像したものを絵画や工作により表現するために必要な紙がどのようにできているか疑問に思う姿があった。

保育者の行った紙漉きという遊びの環境設定の仕掛けから、物が出来上がる過程を知ることや、自分で必要なものを作り出す経験の中で、より物を大切に使用するという意識を持つことができたと思う。

物を大切に使う事から、単一的な視点ではなく、複合的な視点で物を見る心が育っていると感じた。

「今後の方向性」

自分で【たからもの】を製作する中でも、紙漉きに使用しているトイレットペーパーについて、本来トイレで使うものを遊びに使う事に疑問（もったいない）を感じている子がいる。

自分たちが使用したもの（捨てる物）を再利用できないか？というリサイクルの意識も深まっているので、トイレットペーパー以外での紙漉きを行える環境や、子どもたちの生活の中で再利用出来るものを一緒に見つけていきたいと考えている。

「実施案」

- クラスにリサイクル BOX の設置
- 家庭への発信を行い、廃材を集め、再利用して遊べる環境の設定
- 身近にある物の材料を調べられる環境設定（図鑑やパソコンの設置）



7、まとめ

子どもの「思い」から溢れる 未来に繋がる「たからもの」というテーマを掲げ、保育者主導ではなく、子どもたちとの対話により進んでいく日々を大切に過ごしてきた今年度。

昨年度までとは明らかに違い、子どもたち自身による遊びの環境の大きな広がりを感じた。サークルタイムを通して『個の思い』が『集団の願い』に変わり、『目的』を持ち意欲的に行動する子どもの姿や、子どもが自分の経験や知識を生かしながら、主体的に表現し、試行錯誤や友達と対話し確かめ合う姿の中に、自園で考える『科学する心』の育ちが多く見えたと感じる。

『野鳥の森公園に行きたい!』『もったいない』というひとりの思いが子どもたちの好奇心や興味に向かう行動を促進し、保育者も一緒にその広がりを加速させていく事に楽しさや喜びを多く感じる時間となった。

子ども自身が夢（未来）を想像する力や、その夢を叶えるために自身の知識や経験を使用しながら身の回りの環境を創造していく力の育ちは、保育者が教え込む関わりではなく、子どもひとりひとりが主体的に環境に手を伸ばそうとする中で育つという事が、事例を通して確認できた。

これまで、子どもたちの好奇心や新たな発見を生む環境というのは、保育者や施設などが作り上げなくてははいけない**おおがかりなもの**という感覚が多くあったように思う。しかし、今回の事例を通して今私たちが住む地域や、身の回りの自然、生活の中にも子どもたちの興味を深めたり、持続させたりする環境はたくさんあると実感した。

これは、子どもの『思い』つまり、子どもたちの姿をよく観察しながら、言葉や表情、態度を記録し、検証することにより、気づくことができた視点であると共に、保育者同士が科学する心について意識を共有し、対話を深めたことにより感じられたのではないかと考える。

また、科学する心の育ちを検証する中で、昨年度に法人全体で共有した、これからの子どもたちが生きていく『変動性、不確実性、複雑性、曖昧性が高く、先行きが不透明で、予測が困難な状態である未来を生きていく子どもたちの力について私たちが何ができるだろう』という問いに対して、私たち自身も子どもたちを取り巻く環境の一部であることを再確認しながら、【これまで〇〇であったから】という計画をそのまま実行するのではなく、子ども自身が身の回りの環境を主体的に観察し、得られた状況を把握しながら自分で意思決定をしていく事、その意思決定から自分の行動を安心して決められることを保障することが、上記の社会においても必要な力を育むことができることも見えてきた。

こどもの遊びを検証するうえで、単一的な視点ではなく多面的・複合的な視点で検証する事で、子どもの発達をより具体的に把握しながら、その遊びから繋がる心身の育ちについて考え、職員間共有することもできた。

今後も、『子どもたちと大人たちが支え合い、励まし合いながら、共に育つ「共育（きょういく）」を柱とし、地域に根差した保育・福祉・教育活動の充実に努める』という教育・保育理念のもと、子どもたちや保護者、そして、この地域で共に過ごしていくすべてのものへ感謝の気持ちを持ち、宝物（**たからもの**）のような日々を協力しながら守っていきたいと感じた。

8、終わりに

今回の論文作成において、子どもたちだけでなく、保護者の皆様の協力や、地域社会の子どもたちの遊びに対する理解を多くいただいたことや SONY 教育財団幼児教育プログラムに参加されているたくさんの皆様の保育実践を学ばせていただいたことで、自園の保育の振り返りや気づき、新たな挑戦へと向かうことができました。

子どもたちと一緒に生活している東大沢という地域のすばらしさに触れながら、保育の専門性や倫理観を対話しながら深め、成長できましたこと、SONY 教育財団の皆様には感謝の念に堪えません。

この喜びや学びを止めることなく、子どもたちや保護者そして私たちを含めた子どもを取り巻く社会全体が幸福を感じられるように私たちができることは何か、今後も全力で考えて行きたいと思えます。